

白狼天狗と将棋の話	柳筥	四
少女「秘封」倶楽部	ひととせ	十二
幻想競馬読本・競馬の魅力	久我暁	三十
阿求の恋	近藤貴弥	四十
後書き（近藤貴弥）		五二





白狼天狗と将棋の話 柳筈

その年、妖怪の山は暑かった。衣の内に忍び込み、肌  
に纏わり付いて離れない熱気を誰もが不快に思うが振り  
払うことは出来ずにいた。手の甲に吹き出す玉の汗を今  
年の風物詩と諦観しなければならぬ程に、その身を包  
み込む暑気との知恵比べを余儀なくされたのである。

そのような中、額に浮かび上がる玉のような汗を、手  
の平で拭ってはマジマジと見つめている。白狼天狗は暑  
さへの不満を少しばかり大げさに肩をならして吐いた息  
で相殺しようとする、微塵も動かぬ風が溜まるこの部屋  
はまるで灼熱風呂である。汗を拭うための手拭いは既に  
グッシヨリと濡れて重い。先にこれをと願いだした湯飲み  
に入った丸氷は、林檎水の炭酸と共に消え失せて随分と  
小さくなってしまっていた。それでも眼前に置かれた将  
棋盤、そして繰り広げられる局面に対する意識を保つ程  
度には、犬走椀の勝負勘はしっかりと睨みを効かせてい

たのであった。

幻想郷の片隅にある妖怪の山の、そのまた片隅で行わ  
れている将棋大会。この天狗の世にあって大した意味も  
ないはずの、その大会に白狼天狗の犬走椀は並大抵では  
ない覚悟で臨んでいた。家を賭ける、名を賭ける、その  
ようなものではない。この対局に、命を賭けていたので  
あった。

事の起こりは既に何十年も前のことであった。未だ天  
狗の世を誰も平穏たらしめることの出来ない時代に、こ  
の因縁は起こった。

それは平凡なものであった。敵を殺せば、その子に我が親を殺される。子を殺せば、その親に我が子を殺される。大義名分など薄れ去り、ちっぼけな復讐心を抱いて誰もが進める。悲しみを憎悪で塗り潰し、怒りの炎を無理矢理に滾らせて振るい合う刃。唯々、そこには赤く生臭く吹き荒れる風だけがあった。

椛はまだ幼い頃であった。父母を慕い、その庇護愛のもとに日々を過ごす無知で無垢な、ただ何処にでもいたであろう白狼天狗の子供であった。

だが、その平穩無事に見えていた日常は砂上の楼閣のものでもあった。父母が組みしていた穩健派が、それに敵対する強硬派の夜討ちにあい、多くの白狼天狗が命を落とす出来事の一つに椛の父母がいたことが、大きな転機となったのだ。

父母を失った椛は伝を辿って遠い親類に引き取られ育てられ、十数年の後に父母の犬走の姓と共に天狗の表舞台に躍り出た。

そこに至って椛が理解したのは、己の父母が殺されるに値する所業に手を貸していたこと、そうなることが時代の習いであったこと。掲げる錦の御旗が違う同族を、父母は違い、そして手に掛けていた。自分たちが掲げる旗こそ絶対であると信じて疑わず、それに賛同しない者こそ異端であると断じていたのであった。そして、それが父母の命を奪う原因でもあったのだった。

父母に恨みを持つ一派。彼らによって椛の日常は脆く崩れ去った。だが、どこかそうなることを承知していたのだらうか、椛の心の内に生じた憎悪の感情は大きくはなかったのである。無論、仇は討たねばならぬという天狗の世の理は解していた。そのように勧める声もあった。それでも、椛が返していたのは煮え切らない言葉であり、

踏ん切りのつかない、何とも言えぬものであったのだ。

そうして少なくとも時間は過ぎ、天狗の世は平穩を得た。多少の諍いこそ残り続けるものの、同族で命を奪いあうような時勢ではなくなった。体制の変わった世の中で、梶も相応の身分を得て、少しばかりの不満と共に、大方の満足を得たのである。これでよい、という充足を梶は得ていた。これで十分だ、という感情をしっかりと心の内に抱え込めていた。だが、それらこそが砂上の楼閣であることを、父母の仇が生きていたのを告げられたことで再び思い知らされたのであった。己の内にあった充足感はずいぶん何処かで死んでいであろうという諦観が錯覚させていたことを梶は認めねばならなくなったのだ。その仇が将棋盤を挟んで目の前に座ることになる。その事実を知った梶の心中は穏やかではなかった。いや、激流のように荒れ狂うものであった。少なくとも時間がようやく鎮めようとしていた憎悪の炎が、新たな風を得

て燃え上がったのだ。

白郎天狗の将棋大会。それがその舞台であった。何の事はない、大天狗が気紛れに催したものである。参加するもしないも自由。勝ったところで与えられるのは、大天狗が隠し持つ酒が一升。負けても大したものはない。余りある時間を持て余した天狗たちが趣味を競う、形式ばかり真似たものであった。

将棋を嗜むものには誰もがその案内を受け取り、自分の暇との調整を考えてみる。それだけのものではあった。この時、例に漏れず将棋を皆と同じ程度に嗜む梶の許にも案内はあった。いつもと同じ文面の、日時だけが書き換えられた使い回しの案内状。それだけであれば、深いことを考えることもなかったであろう。己の務めの都合と擦り合わせて無理であれば無理と、いつもと同じように判断するだけであった。それを一変させる一枚の書状

が梶を困惑に落とし込んだ。父母の仇が出るだけ記された、差出人の名もないそれが梶を惑わせた。

忘れたわけでもない、許したわけでもない。ただ、整理をつけたはずの仇。それは梶の脳裏に重くのし掛かった。忘れようとしても忘れられるはずもなく、四六時中纏わり付いてくる。仇はいつまでもどこまでも仇であった。先の戦乱が生じさせた仇討ちを天狗の世は推奨もしなければ禁止もしなかった。仇討ちをしようと、それを返り討ちにしようと、何処までも無機質に法度が裁いた。我関せずとだんまりを決め込んで、天狗の世はそれらから逃げてしまった。それが梶にとって、どうしても合点のいかないものであった。いっそ、仇討ちは重罪であると法度が禁じてくれていけば、このような感情は抱かなかったかもしれない。言葉返せば、仇討ちを奨励してくれていれば、錦の御旗を掲げて太刀を手にしていたかもしれない。

梶は大きな決断をこの時迫られていたのかもしれない。日が昇る間、務めの最中のことは言うに及ばず。居室に

帰ってからも浴びるように呑んだ酒の力がなければ眠りにつけない。それ程までに梶は蝕まれていたのであった。

そして、三日の後、目の下にどす黒い隈を浮かべた梶は、将棋大会への参加を申し出たのであった。

梶の将棋の腕前は中の上、時には上の中とも上の下とも言われる程度である。勝てない相手と負けることのない相手が明確に見え、戦法を使い分けることが出来た。灰色の白狼天狗とも呼ばれたこともある程度には名の知れた棋士ではあった。だからこそ、梶は苦戦した。手の

内の大半を知る相手、それも梶を打ち倒そうと明確な意志を持つ相手は、梶にとって未経験の存在であったのだ。

それでも梶は勝った。下馬評で楽勝だとされた相手も、惨敗すると言われた相手も、梶は何一つ油断することな

く指した。全身全霊を掛けて、縦横合算九十一マスの将棋盤向こうの相手と戦った。既に何度歯軋りをしたであろうか、その利き腕に力が籠もったであろうか、震えながら大きな溜息を何度吐いたであろうか。ただただ、貪欲に楯は勝利を求め続けた。一局を踏み越えるにつれ、恥も外聞も何もかも捨て去れてゆくのが楯は感じられていた。勝たねばならぬという炎だけが、楯の心の内に燃え盛り、四肢を突き動かしていった。

そして、楯はついに仇と相對峙することとなったのである。伏せ目がちにこちらを見ることの少ない眼差しであったが、その奥底に潜むのは確かな殺気にも似た闘志であった。それに飲み込まれてしまそうになる楯は、氣負され、闘志を失いそうになるが、奥歯をギリィと噛みしめ、背に力を込める。この対局から逃げることはない

と言いたげな虚勢。少しばかり前のめりに身をグッと固めた姿勢。冷や汗がツツと背を落ちていくのを、若干の不快感と共に楯は感じていた。両腕を脇に寄せ、少しの間も見せたくない有様が、誰の目にもありありと見えるのであった。

そうして先手の一手をもって勝負は始まった。定跡と定跡が絡み合う盤面。獨創性などそこにはなく、ただ只管に手堅く練り広げられるのは、相手のささやかな油断を待ち合うという、忍耐の勝負であった。

盤面だけを見つめて、一切の視線を動かさず、次の一手のみを考え続ける将棋好きの白郎天狗。楯はそれに徹しようとするのであった。

仇は、その名を×××と言う白郎天狗であった。皆が考えるように、楯の父母とは異なる思想信条を持つために、その手に掛けたのである。後悔も反省もないが、少しばかりに未練はあった。幼子である楯が居ることを知



って、尚我が手に掛けるのか、否か。×××は悩み続けたのであった。双方を天秤に掛け、×××が導き出したのは、椀の父母を亡き者にするということであつた。それが何よりも正しいものだと思ひ續けてきたのである。天狗の世の泰平が築かれた要因であることを疑わなかつたのであつた。椀という小さな犠牲と引き換えに、天狗の世は安寧を手にすることが出来たのだと、×××は己に言い聞かせてきたのであつた。

一手毎に椀は長考した。時間に限りがない対局である。どれだけの時間を費やしても問題は無いが、椀のそれはあまりにも長いものであつた。×××が費やすのは長くても五分ほどであるのに対して、椀のそれは短くて五分ほど、長ければ三〇分ほどに及んでいた。

その対局を見る者の誰にも奇妙であつたのは、長考する間、椀は腰の脇差をトントンと何度も叩く仕草を見せたことであつた。意識せずに行っていたのであるう、指

してしまえば脇差から指は離れてゆく。だが、×××と椀の因縁を知る、僅かな者たちには、その心中が穏やかでないことは容易に窺えるのであつた。

対局に際して脇差を持ち込むことは禁じられてはおらず、椀と同じように×××も腰にそれはあつた。大きさは×××が一尺二寸、椀が一尺三寸。それを見えるようにして差す椀に対して、×××は衣に隠れて見えぬようにして差していた。だが、椀の癖に気付いたのか、×××は、ごく自然な体を装って衣の裾から脇差を見せ、ごく自然な体を装って、手を近くに置いてみせた。それに気付いた者たちは、この対局が尋常のものではないことを肌身で感じ、ある者は騒動が起きることを期待し、ある者は無事平穩に終わることを期待し、またある者は椀が本懐を遂げることを祈るのである。

そうして、昼過ぎに始まった対局であるが、疾うに夕刻は過ぎ去り、夜も更けようとしているが、その決着は誰に分らないままであった。椀も×××も接戦であったのだ。対局が始まってすでに一〇時間になろうとしていた。その間、二人は一度もその場を離れることなく、指し続けていたのである。疲労の色は両者に見て取れ、尋常ではないものであることが誰の目にも明らかであったが、それでも二人の手は見事であった。僅かな隙を突いて何度も入れ替わる攻防は、盤上を大きく入り乱れさせ、どちらが優位で、どちらが劣位であるかも判然としないのである。

軽快に鳴り響く駒と盤の音は既になく、まるで濁ったような重い音だけが続いている。立会人も、見物人も、そして椀と×××も、誰もが憔悴していた。いつ終わるのか、どう終わるのか、不毛な戦にも思える対局がそこで続けられていた。

もう、何度目になるか分からない千日手にも思える王手が×××に掛けられる。その椀の声は疲労のためかあ

まりにも小さいものであった。立会人が辛うじて聞き取れる程度のものである。それでも×××には聞き取れたのか、それを躲してみせる。

だが、それは浅いものであった。駒が四方八方に入り乱れ、どの駒がどのように活きているかを把握し続けるには、二人の思考はあまりにも疲れ切っていたのである。僅か四手後。×××は頓死を悟った。もう少しばかり思慮があれば避けることが出来ていたであろう、その頓死は些細な過ちであったのだ。

「参りました」

×××は小さく、そしてはっきりと告げ、頭を下げる。己の手落ちであることは別として、不思議と充足感があった。相手が椀であるからだろうか。殺されても良いという感情すら、何の脈絡もなく生じていた。それ程までの死闘であるように思えたのであった。それ程まで

「ありがとうございます」

×××の言葉に、少しばかり呆気に取られながらも反射的に言葉を返し、頭を下げる。何重何百と経験した将棋指しとしての習慣であった。少し遅れて、×××の頓死で勝敗が決したことを理解し、そしてその手が脇差の近くにあったのを知るのであった。同時に、己の指が自身の脇差を叩き続けていたのにも気付いたのである。樫は力のない溜息を静かに宙へ吐くと、席を立った。足の痺れでよろけそうになるのを踏ん張り、その場を後にする。一步二歩と将棋盤を離れてゆく。力無く肩を落として、どこか寂しそうにみえる背中に×××は声を掛ける。

「すまない」

その言葉を聞いた樫は酷く悲しそうな顔をしながら、その場を離れていくのであった。

△了△

少女「秘封」倶楽部 ひととせ

メリーが、蓮子の婚姻話を聞いたのは、喫茶店での事であった。

二人とも四限目の授業が無く、夕刻を前に時間ができたので、では喫茶店にて今後の活動の話をしましょう、と。蓮子が珍しく真剣な様子で誘ってきたのだ。そして聞いた、晴天の霹靂であった。

古式ゆかしい木造を思わせる調度品が、これまで心地よい空間を彩っていたというのに、一転して、重苦しくのしかかる慣例主義の権化となった。芳醇な香織を放っていた合成珈琲も、その苦い味も、どんな味になってしまったのがわからなくなってしまった。

「いや、結婚じゃなくてね……ただのお見合い」

苦笑いしながら合成珈琲を飲む蓮子。知り合ってから、幾度となく見てきたその表情を見て、メリーは晴天の霹靂に馴染み深い日常を感得し、幾分か冷静さを取り

戻した。

メリーが落ち着きを取り戻したのを確認すると、蓮子は事情を話し始めた。だがその視線はどこか彷徨っている。事実、砂糖とミルクの入った珈琲を、まだ何度も何度も混ぜている。蓮子自身、未だ落ち着かないのだ。

「相手は、ウチのお父さんの、取引先の息子さんらしいわ」

見合いとしては時折ある関係。

「今はまだ若い人なのだろうけど、将来有望であるらしくてね。ゆくゆくは、大きな会社の役員か、そうでなくとも子会社の社長になるそうよ」

どこか口の重い蓮子の話ぶりを見るに、メリーは、彼女自身が乗り気ではない事を理解していた。一方で、年頃の女の子——それも、学業に殉じる大学生が、時代錯誤な見合いを受けさせられるというのにも関わらず、蓮子本人はそこまで嫌がっていない風にも見受けられる。

戸惑いと期待が、メリーにも伝わっていた。今のメリーにできる事は、蓮子の言葉を待つだけであった。何も

いわず、ただただ、蓮子が精神を落ち着かせ、言葉を慎重に選び、仲の良い友人に伝えようというのを待った。

「その人と結婚をするかね。私はずっと大学で勉強をしていても良いと言われたの」

勿論大学は変わるのだけでも、と蓮子は付け加えた。なるほど。東京・京都間が一時間足らず。食事は合成タンパクで、菜園の果実や野菜は富裕層の物。金さえあれば宇宙空間へ遊覧旅行すら可能となり、発展に伴った結果、情報の有無などのアナログな部分にこそ価値が出てきたこの科学世紀。

学問をするにしても、資本金が重要となってくる。ましてや、蓮子は超統一物理学。メリーにしてみれば専門外である為、不用意な発言は控えたい。実験なき論究が空論などと言わない。だが、実験の有無は大きい。大学に残って研究、ゆくゆくは教授職ともなれば、幸福であろう。そうでなくとも、どこか研究機関に入れば、学問に殉ずる可能性はまだある。もしそうでない場合、蓮子も人並みに就職をして働きにでる事になる。それは、生

活に別の楽しみを見いだすと同時に、学問を捨てるという意味だ。

蓮子はそれが苦痛なのだろう、とメリーは推察した。就職の為の学問ならば、克己心や向上心として寄り添う事ができる。だが、超統一物理学ともなれば話は違う。世界の法則に寄り添おうとする学問は、ながら作業では難しい。自然と、専念したい、という気持ちも芽生えようというものだ。

だがそれは。

「貴方は、学問の為に結婚をしようというの？」

それは不義理であった。蓮子自身もしっかりと理解している。だからこそ悩んでいるのだ。だが、断れない理由もある。

「お父さんが勧めたから」

「そんな理由で……」

「学問へ理解をしめしてくれたのよ」

メリーが密やかに唇を噛みしめ、社会主義然とする田舎の蛮行を忌ま忌ましく思いつつ、必要以上には責める

まいと自らを律した。

だが一方で、青春の盛りにあるうら若き乙女が「肉体的に結婚するにふさわしい」というだけの理由で、学業への情熱を人質にして縁談を勧めようという魂胆に、メリーは激しい怒りを覚えた。

その怒りは、蓮子にも通じている。

「今日はこれで終わりにしましょう」

蓮子が静かに発したその言葉で、この日の会合を終了した。

メリーが携帯端末を通じて家の給湯器に命令を出す。帰宅完了と同時に、浴室へと進んだ。いつももうだるような熱さのお湯も、今はたいした熱を与えずに、雑雑とした思考や感情と一緒にザッと排水口へ流されていく。

一体どうしたものかしら。

と、メリーが、お湯を浴びて修行僧よろしく沈思黙考した。とはいえ、メリー自身の願いは既に答えが出ている。蓮子の見合いを――ひいては、彼女の婚姻を阻止する事だ。そうして、メリーと蓮子は自身の将来に大きな

わだかまりを持たず、自らの青春を謳歌する学生へと帰還するだけであった。

だがメリーに社会的な影響力はない。蓮子と同じく、青春の盛りにあるうら若き乙女であった。より言えば、未だ遊んでいるだけが許される身分である。どうする事もできなかった。

それでもなにかある筈。

そう考えながら浴室を出ると、蓮子からの連絡が携帯電話に届いていた。

『一月後。東京へ帰ります』

内容は簡潔な一文であった。そしてそれ故に、メリーには残酷な通達であった。一度はほぐされた精神が、もう一度冷水を浴びせられる。だがそれは、居住空間に侵入した害虫を如何にして排除するかという悪意にも似た感情を想起させるに至った。

さてそれからというもの。

メリーが大学へ通うと、長椅子に座って携帯端末を握って、梅雨時の雨雲にも似た沈痛な面持ちで心の嵐を何

とか抑えようとしているのを見つけた。

また、昼食時などになると、しばらく一人になりたい、とだけ発言をして二人は別々に食事をとる事になった。時折見る、一人で食事を取る蓮子を見ると、自然と胸が痛くなった。

図書館での調べ物であってもそうだ。歴史学の間でもない蓮子が、ただひたすらに過去の文献を調べているのを確認している。

ついには、授業にも支障が出たのか。場所を問わず、端末を使ってレポートを書いている姿を散見するようになった。何人かの友人に手伝って貰っているようだが、出題した教授陣の中には気難しい者もいる。一筋縄ではいかなかった。

一人、自らの胸中を相談する事も不可能なまま過ごす蓮子を見て、メリーもまた人知れず心を痛めていた。何かできないものかと、常々考えていたのだ。だが、学部も違うならば、見合いの愚痴を聞く事もできない。

メリーは無力であった。

だがしかし。蓮子の目の下にあるクマを一段と濃くした時だ。ついにメリーの理性が瓦解し、己が抱える友情の炎が示す方向へと駆け抜けた。

「蓮子。お見合い、もう断ったら？」  
でも、と。

冬に吐く吐息のようになりしつかりと、それでも、すぐさま霧散するか細さで、蓮子の言葉が漏れ出た。

メリーをウッスラと見る淀んだ瞳からは、幾度となく暗中模索したその道程が見て取れるようであった。わずかに蓮子の頬がこけているのは、長く隣に立っていたメリーだけが気づいた事実である。

このままだと、貴方が倒れてしまうわ。お願いよ、蓮子。貴方のそんな顔はもう見たくないの。だから!!」

そこから先は、蓮子の手で制された。  
皆まで言わなくてもわかっている。

蓮子とて、今の状況が良くない事はわかっている。心労が重なってか、突発的に胃がづり上がって呼吸する事も辛くなる時がある。

一生に一度の結婚、というわけではない。

書類上の事だ、と判断して軽々に結婚をするものもないし、好む好まざるを問わず独身でいる者も増えた。

だが結婚というのが人生の大事である事は、いつの時代でも同じである。少なくとも、蓮子にとっては、どれだけ考えようと、時間も材料も足りない案件であった。

軽々に決めるわけにはいかない。

「蓮子。将来が不安なんだったら。なんなら、私が……」

そこまで聞いて、蓮子が立ち上がった。その瞳には、日々繰り返し返している暗中模索の苦悩を侮辱するなど、憎々しい煮えたぎった怒りがあった。

「私達では、まだ何もできないのよ!!」

蓮子の激情は、蓮子自身にも驚きを与えるものであった。だが、土石流は止まらない。

「生活費だって稼がないといけない!! 好きな人生を送るには、まだ努力しないとイケない!! 一大学生が、将来を人質に取られた状態なの!! 一方的になんて、断れ

ないのよ!!」

現在を苦悩する表情に、友人を怒鳴りつけた事への後悔を多分に混ぜながら、蓮子がポツリと囁いた。

「好きだからそれでいいって言えるだけ馬鹿になりた  
い」

ゴメンナサイ。

そう言うと、蓮子は足早に去っていった。

メリーは、追いかけれなかった。

翌朝、蓮子から一通の電子手紙が届いた。

『少し早いです、東京へ行きます』

簡素な内容であった。

だがメリーが、先日、蓮子の見せた激しい怨毒の形相を思い出すには十分であった。

何て事をしたんだ、と。メリーは前日の行動を僅かに後悔した。が、その後悔は一瞬にして霧散し、次に現れたのは、心身不安定なまま人生の大事における決断を委



ねられる蓮子への、痛烈な憂苦であった。

ただただ、蓮子の心身を案じ、身の破綻を防ごうとして動いたメリーであったが、かえって逆効果になってしまった可能性もある。

そんな憂苦の最中、続けて、蓮子からの連絡が届いた。『岡崎教授へのレポートを提出してください。あの人は紙でしか受け付けませんので、代わりにお願いします。既に印刷も終わっています。鍵はいつもの所にあります』

些か固い文言であったが、それでも、内容としては馴染みある物であった。ハイハイ、とため息を吐きながら、メリーは殊更に安堵の表情を強くした。

いつもの場所こと、ポストの取り出し口に仕込んである二重底を押し上げて、八角盤を取り出した。

何年も前に開発され、今や古めかしい物となった『ディセタグルメント・システム』——つまり知恵の輪施錠であった。

友人の趣味が開けひろげになったこの施錠方法である

が、メリーも手慣れたもので、すぐさま八角盤を動かして二つに分割。これが鍵となる。

壁の小窓を開けて、その鍵を差し込んだ。

開錠。

扉を開けると、掃除されて生活感の薄くなった空気が流れ出てきた。そのまま中へ進んでいくと、一つに纏められた紙の束があった。

では、と。

メリーが大学へ出発した。

正門を越え、蓮子が日々通っている方向へと急いだ。

やっと高くなりだした頃の別学部は、僅か一時とはいえ、メリーが抱えていた蓮子への憂苦を振り払った。

「失礼します」

「あら、別の学部の生徒さん？ まあ、いらっしやいな」

メリーを快く迎え入れたのは、若くして比較物理学の教鞭を取る教授。全身、赤で揃えられた衣装が特徴的な才媛、岡崎夢美であった。

「宇佐見の小論文だね。ありがとう。危うく、彼女を減点をしなければいけない所だったよ」

メリーや蓮子とそう変わらない世代の少女が、その柔らかな指を動かして、蓮子のレポートを読んだ。生徒の提出物を確認する表情ですら、あどけない可愛らしさが浮きだつて、恋文を読んでいるようですらあった。

はた、とメリーはふと思ひ立った。そしてソレが吉日であると言わんばかりに、『トモダチの話なのですが』と前置きをして口を開いた。

「二十になるかならないかの年齢で、見合いをするというのです。友人の人生や、将来が心配で」

「そうだねえ。見た感じ、君自身も辛そうだ。我が身のように考えているんだろうね。でも、そんなに深く考えなくてもいいんじゃないかあ？ 少なくとも、友人は友人で、君は君だ」

「ですが先生。結婚というのはやはり、一大事です」

「そりゃそうだ。払う税金も変わるし、受ける福祉も変わる。そうそう軽々に決める事ではないだろうよ」

ふむ、宇佐見の論文は及第点。

そう言いながら、岡崎夢美は紅茶を取り出した。傍らには薄切りレモンが二枚とイチゴジャム。ロシアンスタイルであった。

かけたまえ、と。

岡崎夢美に促されて、メリーは長椅子に座った。

「そうだねえ。もう少し真面目に返事をするとしよう。私個人の意見を言わせてもらえれば、私なら気にせず結婚をするさ」

時代が時代とはいえ、メリーには驚きの答えであった。「私の叡知を家庭や一般に放流するなどというのは学会にとつての損失だからね」

意地の悪い笑みを浮かべて、夢美はそう言った。確かにそうであろう。だがそれは、夢美個人の状況が作り出した結果であつて、メリーの話には何の因果もない。

冗談だよ、と夢美がことわつてから、言葉が続いた。

「とはいえだ。いざ結婚をするとなると、後は一気に同居まで駆け込むと思うよ」

メリーがイチゴジャムを口に含んだ時、夢美は事も無げにそう言った。夢美の言葉に、僅かに喜色の色が見える。途端、メリーに鮮烈な甘酸っぱさが、胸一杯に広がった。きつとイチゴジャムのせいだろう。

「理由は聞いても——」

「そんな大きな理由はないさ。強いて言えば、年寄り連中かな」

「年寄り連中、ですか」

夢美が、やれやれとでも言わんばかりに両手を掲げて、大仰なしぐさで困った感情を露にした。

「そうだと。学会で長くから生活している年寄り連中さ。私が持論——つまり新説の『魔力存在論』——を展開しているのだ。年寄り連中は生暖かい目をしながらコチラを見ていうのよ。今を大事に、だとか。青春だねえ、とか」

その光景が目には浮かぶようであった。

一人壇上に上がり、立体映像を使つての論文発表。白熱する夢美の言動とは裏腹に、寒々しくなる傾聴者。そ

して夢美の言動を若さ故のものと断定し、見守る視線を送る。かくして夢美は、自らが持つ情熱の炎をたぎらせると同時に、冷淡な侮蔑の感を感じ得ないでいた。

そんな光景を、夢美は幾度と無く繰り返ししてきたのであろう。

「一体、何を言っているのだろうかねえ年寄り連中は。我々、二十を下回る者からしてみれば、今を楽しむなどというのは造作もない事だというのに」

は？ とメリーが目を丸くした。若くして教鞭を取る才媛にしてみれば、後顧の愁いなどというのは存在しないという事であろうか。

「何も心配する事はない、という事でしようか？」

「そうじゃないさ。実際、私も心配さ。大学だって、新しい風を入れたがる。私もいずれはここを去るだろう。だが。それはそれなんだよ」

力強く、夢美は断言した。そのハッキリとした口調に、メリーは、かつて見た、ポーチュラカのこやかさを思わせる快活さを見いだした。

「人生を長く過ごし、不幸に塗れ、ついには少し不幸であった方が良く、等と言いだめる老人どもだ。忘れたのさ。己の善と美意識とを追求するだけだというのに」

お前もそうだろう？ と、夢美の視線が問いかけてくる。その視線が、メリーの心を浮き彫りにしたという事実はない。

だがしかし、メリーの脳裏には秘封倶楽部の活動記録がありありと映し出されていた。

蓮台野への十字軍的遠征、卯西新幹線ヒロシゲでのせわしない旅行と冥界参り。カフェテラスで語った、不老不死の薬が作る顕界ネクソでも冥界ロフアでもある世界ンタジア。廃棄人工衛星トリフネ探索。サナトリウムを出てすぐに行った信州旅行と伊弉諾物質イザナノモノ。詳細に纏めた報告書、そしてうらぶれた酒場での怪しげな会談。

互いの目を薄気味悪いと言いつつしたのは何時の日か。冥界参りなる不可解な独自の奇習を遊んだのは何処であったか。合成品の洋菓子と珈琲の味はいかなるものか。はたまた、……。

「道は決まったかね？」

夢美の言葉で、ハッとメリーは意識を取り戻した。夢美の楽しそうな笑顔が、メリーを見ている。

「はい、ありがとうございます!!」

鞆を抱えて、メリーはそのまま部屋を飛び出した。

快活さが、或いは、厚い友愛の情が、青春に生きる若い精神を、情熱的に動けと駆け立てた。

逸る心が、メリーを動かした。

校舎の引き戸を開ければ、満月の深夜色に薄暗いなった板張りの廊下が延々と続いていた。荘厳複雑な欄間のついた和風屋敷の廊下を、飛び跳ねる兎と共に駆け抜けた。

夢だ。

メリーは一瞬思った。

科学世紀はおろか、物理的にあり得ない何百米もある長い板張りの廊下。そんな場所を、突如現れた兎と並走するなど、夢でしかあり得ない。

だが、夢だからなんだというのだ。

メリーは願った。

蓮子に会うのだ。その為ならば、たとえ宇宙空間の果てであったとしても、たとえ地下四万由旬の果てにある地獄であったとしても、必ずや踏破して見せる。

メリーが襖を開ける。

今度は巨大な大穴が広がっていた。

巨大な八角柱と、幽寂とたゆたう無数の光。

どこか別の異次元空間に繋がったであろう事は明白だ。足元を見れば、夜の海へスカイダイビングをするような恐怖感。墜落すれば地獄か極楽。そもそも底があるのだろうか。

だがメリーにとって、延々と続く板張り廊下も、底知れぬ異次元空間も、平等にただの通過点であった。

やあつ、と。

メリーは一步踏み込んで飛び込んだ。

落下の強風に靡く髪、空気圧に押されてたなびく耳、一葉の枯葉みたいに落ちる全身、<sup>スターボツ</sup>星虹にならないのが不思議な程の落下と速度。幾分か落ちた頃、やがて、浮か

ぶ光が消えてなくなった。

次に浮かび上がるのは赤い格子。

目に見える速度も薄らぎ、もはや浮いているのかもしれないと疑いながら、沈んでいく。ともすれば、行き先さえも見失ってしまふようなこの光景。

メリーは、自分の進む道を見失わないようにした。心に想うのはただ一人。

厚い友愛の情を抱く、悪友であった。

「おやおや、困りますねえ。夢の世界だというのに」

そこへ現れた珍客。とがった帽子に赤くてフワフワモコモコの服。季節外れのサンタクロース。

ちちんぷいぷい。

彼女が指先一つ動かせば、眠った羊の大行進。その内の一匹に乗って、メリーは流されて夜の世界へ。

「貴方に吉夢が訪れんことを」

「二時三分二十二秒」

蓮子がポツリとつぶやいた。メリーと「冥界巡り」を

した墓場の冷たい風が、蓮子の頬をベタバタとなで回してくる。

素敵な墓場で暮らしましょ、とならないのが、宗教的云々をのぞいても不思議であった。

「あぁ〜」

蓮子の口から、大きなため息が一つ、出た。油断したなぁ、というのが本音である。

見合いの相手だ。

存外、イイ男であった。場所が場所なので当然であろうが、清潔な服装をきていた。だというのに、定型テンプレート的な格好でもなく、衣装が勝ちすぎないように華美に走らず、本人が勝ちすぎないように質素に走ってもいない。チャリと見える宝石のついた時計は、まあ自己主張としても妥当な範囲。

立ち居振る舞いも、問題ない。猫をかぶっているとしても、まあボロをみせなかった。ややもすると優男な印象を与える男が、背筋をピンと伸ばして、存外、骨ばった手を器用に動かしているのは、男を実感させてくる。

かと思えば、ニコニコして、女子高生かと言わんばかりに楽しそうに焼き菓子を頬張っているのは、なるほど、中々に女心を刺激してくる。そういう男が好きだ、と公言する同期生がいるのも納得する。

現状、見合いの結論は出ていない。つまり、積極的に断る理由が無いまま保留、となっている。

運良く流れてくれれば万々歳である。

でなければ、蓮子が悪役になるか——結婚の二文字だ。メリーの発言はもつともであった。

結婚というものが、紙切れ一枚の契約だという者はいる。かといって、それが全てではない。生活様式も変わってしまうのだ。

是々非々であれ、白黒であれ。

決着をつけなければならぬ話だ。

「キャッ!!」

か細い悲鳴と共に、物陰から激しい音が聞こえてきた。墓石や桜の下にいる御仁には申し訳ないが、宇佐見蓮子は生きている。遺憾ながら冥界巡りはご遠慮願いたいな

どと思いながら、蓮子は次の反応を待った。

「いたたた……」

「メリー!!」

僅かに聞き取れた小さな声の正体は、悪友であった。境界を見る、という奇妙な瞳を持つこの友人は、時に空間転移すら可能とする。そうやって『ホンモノ』の筈を持って帰ってきた実績がある。美味しかった。今回も同じ方法をとったのであろう。

蓮子は悪友の身を案じた。

この悪友は、ただでさえ一度、ウイルス性に依る譫妄と診断されて診療所サナトリウムで隔離治療を受けていた過去がある。その事実には疑ってはいるが、二度目は考えたくない。

「大丈夫?」

「平気よ」

それより、と。

メリーは蓮子の手を握った。懇願するかのように頭を垂れ、泣きついた。メリーの出す異様な雰囲気から、蓮子はすぐさま異常を察知した。

「私は、貴方がどういう答えを出そうとかまわらないわ。でも、貴方の人生は未来だけではないのよ!!」

メリーの悲痛な叫びが、新たな境界を幻視した。そしてそれは、メリーの目を触る形になっている蓮子に、幻視を共有する形となった。

「これ……!!」

蓮子が、メリーの幻視を即座に理解した。

ありありと映し出される秘封倶楽部の活動記録。

蓮台野への十字軍的遠征、卯酉新幹線ヒロシゲでのせわしない旅行と冥界参り。カフェテラスで語った、不老不死の薬が作る頭界ネックでも冥界ロフアンタもある世界。廃棄人工衛星トリフネ探索。サナトリウムを出てすぐに行った信州旅行と伊弉諾物質イザナノモノ。詳細に纏めた報告書、そしてうらぶれた酒場での怪しげな会談。

互いの目を薄気味悪いと言いつ合っただのは何時の日か。冥界参りなる不可解な独自の奇習を遊んだのは何処であったか。合成品の洋菓子と珈琲の味はいかなるものか。はたまた、……。

寒空に冷えた蓮子の頬を、熱い感情の滴が流れた。

その感情の正体が、如何なるものであるかは、蓮子に自覚できない。

ただただ、かつて過ぎた美しい日々を改めて目の当たりにした時、自身の感情が暴走するのを感じ取っていた。そして奇怪にも、その感情の暴走を、嬉しいとすら感じていた。

「貴方の未来は貴方の物よ。でも、私達は、未来の為に生きているのではないわ。今日を生きて、明日を後悔しない為よ」

幻視として映し出された活動記録が、蓮子の視界から消失した。するとメリーが、瞳に夜露を湛えて、全てを包み込む笑顔をその美顔に浮かばせていた。

いつも蓮子が見ていた笑みだった。

大学の一室で。

ヒロシゲの隣で。

喫茶店の席で。

そして、互いの部屋で。

ふと見上げた時に入る笑みが、今も蓮子を守らんとしている。

途端、蓮子は我が身が恥ずかしくなった。

この笑みを前にして、蓮子は自分の未来にのみ集中したのだ。無論、それが絶対悪だなどというわけではない。自分の未来を真剣に考えて何が悪いのだと、人は言う。だが、今回に限れば、そうではない。

蓮子自身の善と美意識とが、己の行動をたしなめた。

蓮子が細い手を絡めて、メリーの手をかたく握りしめた。細く、柔らかく、いともたやすく折れてしまいそうな手。

もうこの手は離さない。

自然と、そんな感情が湧き出ていた。

「ごめんなさい。メリー。私」

蓮子の言葉を、メリーが首を振って否定した。

「何も言わなくてもいいの」

今はただ、言葉を投げかける。

その言葉が、一つの波紋となって、悪友の心に響けと



願いながら。短い生で得た物を、何とかして言葉にしよ  
うと心がけながら。

「貴方が何を選ぼうと、それは貴方の未来よ。でも、私  
は——私は、貴方が嬉しいと思った時も、困った時も、  
悲しい時も、貴方の隣にいたいと考えてるわ。それと同  
じように、私は、貴方が隣にいてほしいと考えてるわ」  
メリーの瞳が、そしてメリーの言葉が蓮子に伝わる。  
「人生の節目を貴方と迎えたいと思っっているわ。これか  
らも。ずっと。ずっとよ」

甘い言葉。

シタリと落ちたメリーの涙が、滂沱した蓮子の涙と混  
じり合った。二つの滴は、繋ぐ手のように一つとなり、  
孤独に堪える心のように震えた。

額を合わせた。

見える世界は「彼女」だけ。

「——」

どちらから、となく出てきた言葉。

子供のするごっこ遊びのよう。

だけどそれが、蓮子とメリー。二人の絆を強固なもの  
にする、魔法の言葉であった。

「健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲  
しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛  
し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある  
限り、真心を尽くすことを誓いますか」

ハイ、と。

二人の言葉が響いた。

「誰に誓ったのかしらね？」

「勿論、私と貴方、二人によ」

茶化す形で『誓いの言葉』という、ほんの小さな楔が  
打ち込まれた。だが蓮子は、輪郭を弾けさせて、全ての  
不安を打ち払う笑顔を浮かべていた。

それは、メリーが幾度となく見てきた笑顔であつた  
大学の一室で。

ヒロシゲの隣で。

喫茶店の席で。

そして、互いの部屋で。

ふと見上げた時に入る笑みが、今もメリーの不安をぬぐい去った。

女二人の約束とするには、あまりにも大仰な文句が、メリーの理性を羞恥に染め上げた。一人であったならば口にはしない、有り得ない言葉であった。

一方で、あの大仰な文句こそが、二人の善と美意識とを明確にする言葉であった。

二人の笑顔に凶兆の刃物が食い込み、二人の平穩を別離の不安が飲み込もうとしても、二人には信じるべき誓いがあった。

ふとした瞬間に見せる世の塵埃が、二人の視界を埋め尽くさんばかりに飛来したとて、今の二人には、己の善と美意識とを具現するための保証人がいた。

秘封倶楽部は永遠となるのだ。

さて、ここから先は簡潔に記す。

まず、蓮子の見合いである。在学中であることを理由

に「今回は縁がなかった」との返事を出した。無論、今となつては、蓮子とメリーの二人が世の塵埃に埋もれるとは、全く思わない。

だが二人は、その直情を通すだけの青臭さを持ち合わせてはいなかったし、無理を通して道理を押し退けることは不可能だと知る程度には、理性的であった。

故に、今回の見合いは破談する、という方法を取った。問題は、相手方が——相応にはあるが——蓮子を気に入っていたようで、「では、次回の縁に期待しましょう」という返事で締め括られた。

思わぬ問題が生じたのは、大学に戻ってからであった。蓮子が、文学部史学科の人間に取り囲まれた。内容はいたって単純。見合いの話であった。科学世紀の遙か昔、昭和年間を最後に文化的な勢いは衰え、平成年間において小規模、かつ、復古的に細々と行われるのみであった。その後、見合いの文化はほぼ死滅する。

その「かつて存在した文化」を行い、貴重な情報源となった。ましてや同じ学内に存在しているというのだから

ら、熱狂的な取材が行われた。文学部史学科の教授が音頭を取った故に、取材班は冷静さを取り戻す。他、学内新聞の紙面にも登場する事となったが、割愛する。

加えて、岡崎夢美からの論文に対する質問が幾つか届いた。要は指摘である。評価としては及第点を越えているものの、不明瞭な点が幾つかあった為であった。これに関しても、それ以上の事はなく、事なきを得る。

平穩が訪れたのは、一週間が経ってからであった。

夕刻を迎え、月が僅かに高くなった。宵の明星も輝いている。北斗七星が南へ伸びると、うだる暑さの夏が来る。一瞬に過ぎ去る季節の変わり目とうらかな陽気が、蓮子とメリー、二人を温めていた。

騒動も収まり、楽しい学校生活も戻ってきていた。悩ましいのは課題の期日と今日の夕飯、そして、次の倶楽部活動の資金捻出であった。

ただそれも、砂糖が多く入った紅茶と共に飲み干した。甘い。もう一杯、と思わず言いかけた。

「あっ、蓮子!! あそこ!!」

メリーが指差したその先に、一つの揺らめきがあった。幾度となく見ている現象——境界である。

しかし契体な点もある。

その境界は、強い光を放っている。これまで多くは、消え入りそうな幽かな光であった。前例がない。

ふと、メリーに暗い塵埃の天幕が襲いかかった。最高の友人と送る青春。ふと手にしたこの幸福を、若者特有の迂闊と油断によって失ってもいいものか。

メリーの不安げな視線が、蓮子を探した。

ふと隣を見れば、紙カップを逆さまにする程の勢いで紅茶を飲み干していた。カップを握りつぶして一秒、そのまま袋にしまいこんでもう一秒。口を結んで計三秒。旅立ちの準備は万端だ。

目の前には眩く光る境界。

その奥は、直接見るにはあまりにも明るく、深く入るには恐ろしささえ感じる不明瞭さがあった。

「行きましよう、メリー!!」

「はあ……仕方ないわね」

二人の笑顔が、二人を守る。離ればなれにならないように、と手を繋いだならば、どんな困難にだって立ち向かう勇気が出てくる。

「記録を取りましょう。蓮子。今、何時？」

「十七時二十八分、四十五秒。せーので行くわよ」

「手、離さないでよ」

「せーの!!」

◇了◇



私の題は「競馬の魅力」という題であります。しかし、諸兄姉に競馬の魅力を説くというのも、白蓮公に説法をするようなもので、あまり気の利いたものではありません。また、競馬の魅力というよりも、何かもつと魔力というやら、妖力というやら、とらえどころのない大変なものに、搦め捕られているような気持ちがあるわけです。ですから、この幻想競馬というものが始まってこの方、競馬のない日は何だかぼんやりしてしまつて、本を読む手が止まってしまう始末でございます。そんな具合ですから、多くの里人が心待ちにしている週末、ここが逆に競馬のお休みの日ですから、むしろ憂鬱な心持ちにさせられてしまうわけです。阿求などに言わせると、たかだか二日も辛抱できない馬狂いだそうです。しかし、販されているのに、褒められているような気にさせられ

るのは、一体どういう訳なんでしょうか、まったく不思議な物でございます。

皆様方は、私よりもその感が強いだろうと思われる次第であります。そういう訳で、私ごときが競馬の魅力を説く必要はちつともないと思います。私も、こうして競馬場にやってくるのは競馬を見るためです、高いところにも立つつもりはありません。ただ、開場中の出し物に一つ喋ってくれ、と博麗の巫女様に言われてしまえば、私などの者が断れるはずがありません。そういう故があつて、こうして話をする事になつたわけですから、何を話そうかと考えて、しばらく考えて思いついたのが、馬券買いについてのことです。私の経験と、この幻想競馬のあらましを踏まえてお話ししてみるのは、どうかと思つたわけです。

この中には、きつと私よりも女人の方がいらつしやつて、本居小鈴は甘いもんだ、とそう嘲弄されてしまひますかもしれないが、そんなことを考えていたら私は何も話すことはできなくなりますから、ここにいらつしや

る方々は、私よりも物を知らないと思つて話をさせていただきます。

そもそも、この幻想競馬が始まる前に、この郷に今の形の競馬はなかったのは皆様の方がよっぽどご存じでしょう。博麗神社の祭礼競馬、境内や耕作地を使って行われていたあれです。今でも、お爺さんやお婆さん達に競馬と聞くと、あっちを思い出す方が多いのではないでしょう。農馬や、熱心な家ではそれ専門に育てられた馬を出し合つて、あのころでさえも二百頭に届くほどであったと記録されています。この郷にはこんなにも馬がいたのかと思わされています。ただ、それはあくまでも半年に一度の祭礼であつて、今のように毎日競馬はあつておりませんでした。それが大きく変わったのが十数年前の異変であるのは、皆様方の記憶に新しいところではないでしょうか。突如として郷のそばに現れた競馬場を成仏させるために、巫女様方が奔走し、結果主催するに至つたわけですから。こうして始まつたのが、幻想競馬というわけですね。

さて、ここで走っている馬の種類をご存じでしょうか。勿論日々馬券と向き合つていらつしやる皆様方には、言うまでもない話ですが、アングロアラブ、すなわち四分の三近くはサラブレッドの血を持つている馬たちです。では、何故アラブなのか。そのことをご存じでしょうか。競馬という速さを競う競技で、何故スピードの面ではサラブレッドには及ばない馬たちが走っているのでしょうか。そもそも、アラブにはサラブレッドの血が入っているわけですから、サラブレッドがいはいはなはなしいのです。それでも実際走っているのは、アラブの馬たちです。

そうですね、アラブは速さではサラブレッドに劣るものの、力と耐久性に優れております。それに、週に一度は走らないといけない、重い馬場をこなさないといけない、こういった理由から、サラブレッドよりはアラブの方がこの幻想競馬にふさわしいものと言えるでしょう。また、サラブレッドというのは、とても繊細な生き物ですから、頑丈なアラブに比べれば育てるのが大変です。

それだけでなく、アラブは強い馬の種からは厩馬が出ることはまずありません。そういった生産する側の事情も絡んでいると思われるのは仕方ありません。ですがそれは結果的にそうだっただけで、実のところ、もっと理不尽な理由によってアラブしか走れないのです。

何故、この幻想競馬がアラブの競馬であるのか、それはかの競馬場が外の世界で忘れられて来たからに他なりません。時折、入ってくる外の世界の者に話を聞けば分かるのですが、外の世界で競馬と言えば、走っている馬は全てサラブレッドなのです。あの紅魔館の主人が住んでいた土地では今でもアラブ競馬が残っているそうですが、それでもほとんどがサラブレッドの競馬になっています。つまり、あの競馬場がアラブを求めていたからなのです。

まあ、先程名を出した紅魔館の主人に言わせれば、この幻想競馬のアラブは偽物だそうですが。確かにあの方が見られていたアラブ競馬というのは、純血のアラブ、つまりサラブレッドが入っていないものみたいですから。

以前、くだんの純血を見せていただいたのですが、小柄ではありましたが非常に美しい馬でした。そして、幻想競馬に出走している競走馬に入っているアラブの血は、紅魔館で育てられたものが多く含まれているのは、皆様もご存じでしょう。幻想競馬のブリーダーの二大巨頭のうちの一つ、紅魔館のスカレット家が運営しているスカレットファーム。純血アラブの種牡馬を何頭も持つあの牧場は、やはり強い馬を作り出すことに定評があります。他の牧場では、強い馬に強い馬を掛け合わせていくと、どうしてもアラブの血が薄まって行って、最後には競馬場を走らせることができなくなるわけです。どこからか、純血アラブを手に入れたとしても、筋の通った血統を持っておりませんから、なかなか安定して強い馬を作るのは難しいようです。

それでも、二大巨頭のもう一つ、守谷ファームは外の技術を上手く活用しながら、個人の生産牧場をまとめ上げ、大グループを形成することで対抗をしているわけです。とうとう今年は、こちらの牧場から生まれる馬が初



めて幻想優駿を制覇し、続く八雲記念も勝ちました。残された年末の博麗記念、そして年の納めの幻想大賞典の四冠完全制覇を視野に入れており、いよいよ王座逆転かと噂されているのは、私が言うまでもなくご存じのことだと思えます。それ以外にも、外の世界からやってきて以来、長距離馬の育成に定評のある目白牧場に加わり、最近では地底のコメイジスタッドが育成牧場としては力を伸ばしてきています。

さて、そんな中でどう馬券を買っていくかが、肝心要の話でございます。本当に難しいものです。十数頭、最高でも十二頭の中で、たった一頭の勝ち馬を見つける必要があるのです。少なくとも、馬券を取るためには、上位三頭に入る馬の内、一頭は見つけなければなりません。当然、強い馬は分かっていますが、馬自身に、その日の健康、気分があります。レースに出れば、出遅れることもありましようし、包まれて身動きが取れなくなることもあります。勿論、騎手の巧拙や失策もあるわけです。況んや、強弱が分からない馬が、この中に数頭も混じって

いれば、それこそ何が何だか分からなくなるというのは人情というものでありましよう。

ですから、それだけに、自分が見出した馬が四コーナーを回った後から、圧倒的に追いつがる馬を引き離して一着を取った瞬間の快感は、それまでの負けを取り返すような気持ちになるものです。この勝敗を決めるときほど華やかなものは、私は知り得ません。しかし、競馬で儲けようというのは、非常に難しいものだと思います。相場などという、目の前に見えないようなものよりも、本当に難しいです。相場は上がるか下がるかの二つに一つです。ですが、競馬は少なくとも五頭程度の中から、多いときには十二頭の中でどれが来るか分からないからです。これは賭け事であるかどうかは関係ないことなのです。そもそも、競馬というのは賭け事だと思われていますが、そうではありません。以前は、寺子屋の先生などからも、そう思われていて白い目で見られたものです。まあ、最近ようやく分かってもらえたようですが。競馬は出走する全ての馬の勝つ可能性が、他の賭け

事、例えばビンゾロのサイコロの目のように、同じようにあるかという、決してそうではありません。競馬は強い馬が勝つのです。重ねて申し上げますが、決して賭け事ではありません。それを賭け事だと思っている人は、まったくもって競馬というものを分かっていないと私は思うわけです。

さて、ここからが私の馬券の買い方の話になるのですが、競馬は必ず強い馬が勝ちます。これだけは事実だと思えます。確かに、大穴が空くと、非常に弱い馬が勝つたように人は思うのですが、それはそれまで実力を発揮できなかった馬が、初めて実力を出したことに他なりませんし、もしかしたらかつて勝ったことがある馬の場合、何か条件があるのかもしれない。このあたりは、数年にも及ぶ成績をしっかりと見ておけばよく分かるはずですが、穴を空ける馬を見つけるのはこれまた難しいこととございます。そのためにはですね、実力を知るには色々な方法があります。一番には、やはり血統でしょう。先程、牧場の話をしたのもこのためです。紅魔館が繫い

できた血統はどうなのか、守谷神社はどういう配分をしているのか、新興の牧場はどういう風になっているのか、そんなちょっとしたことを調べるだけでも、競馬への見方というのが変わっていくように思います。そういうことを研究していくことで勝ちに近づいていくというわけです。また、血統を知ることによって馬券を買うときに自信がきます。この馬は走るだろうか、走らないだろうかなどと、不安に思わず確信を持って馬券を買うことができるわけです。

それから二番目には過去の成績、最低でもここ五走の成績、さらにここ一二年の成績まで見ておけば、きっと穴を空ける馬を推さえることができると思います。

他に上げるとすれば、馬格や馬の気合いを見ることです。これはレースの前に曳き馬を見るしかないのですが、正直、馬の格好は誰でも知っているし、格好だけでは気合いなどはよく分かりません。ここで取り上げておいてなんですが、私にはよく分からないのです。確かに何となく力がありそうだなと思って買った馬が、レースで勝

つこともありはするのですが、それが論理立ててどうかと言われると、まったくもってあやふやなものです。この幻想競馬が誕生した頃から、競馬をやっている私ですが、こんなものです。相馬眼がある者に言わせれば、どうしても気合いが分かるようになりたければ、三年くらい修行する必要があるとのこと。私は今更三年修行してやり直すのは嫌ですから、馬は分からないということにしておきたいです。ですが、辛うじて分かるのがあります。それは新馬戦です。こればかりは初めて走るということもあるので、どうしても強い馬と弱い馬が混じって走るわけですから、明らかに見ただけでこの中でどれが強いというのは分かるはずです。

他にも、騎手の巧拙などもあるにはあるのですが、良くて二割の勝率であり、確かに上手な騎手ならば五割近くは三着までに持ってきます。しかし、それは明らかに強い馬にまたがる可能性が強いのであって、猫も杓子も勝たせるわけではありません。むしろ、名手と呼ばれる方と手が合っていないければ、強い馬が力を発揮できない

ことだってあります。ですから、その乗り手がどういう乗り方をするかというのは、しっかり把握するという意味では騎手を知るといえるのは悪くありません。前に行くのか、後で控えるのか、中には頼んだ馬主が思いも寄らないような騎乗をする者だっているわけです。そう言った意味では騎手を知ることには、確かに必要なことなのかもしれません。しかしそれは、勝つための知識ではなく、負けないための知識であるように私には思えるのです。

ただ、馬にアイドルホースがあるように、騎手に人気者がおおり、その騎手が乗るから買うというのは否定されるべきことではありません。彼女ら、また彼らも人気商売ですから、物語をこれまで作り上げてきたように思います。幻想郷競馬が始まらずと馬に乗っている者、父や母が騎手でその跡を継いだもの、まったく縁はなかったがひょんなことから乗ってみて勝ち続けている者、多種多様ですが、一様に馬を愛していることには変わりないと思います。是非、お気に入りの騎手を決めて馬券を買うというのも、勝ち負けは横に置いておいて、楽し

いものだと私は思うのです。

そして、最も大事なことなのですが、それは本命穴馬に惑わされず買うということです。このことが、やはり私には一番大事なことだと申し上げたいと思います。妙味馬鹿とても申しましようか、旨味のある穴馬券ばかり買う者もいれば、手堅く本命馬券を買う者もおります。しかし、これはあまり良い考えとは私は思っています。確かに、本命馬券というのは、皆が強いと思っているから馬券が売れていますし、実際に強い馬であることが多いです。また、穴馬券というのは、当たったときの配当が大きいのが魅力です。ですが、これは他人の意見に流されているだけのようには私は思うわけです。競馬というのは確かにお金を賭けている以上、外してしまえば損失になってしまいます。ですから、馬券を当てるのを本義としてしまいそうですが、そうではないと私は思うわけです。自分の知識や、思考の元に馬を鑑定し、他人が間違った鑑定をしているのを、正しい勝ち馬を導き出すことで証明することが本義であって、馬券をただ当て

るのでは、その競馬というものの極地を無にする行いではないのでしょうか。結局、流された馬券では後悔の種となるはずです。勿論、人に聞く馬券などはもってのほかだと思わなければ。人に聞いて買う馬券などは、つまるところ競馬場へ金を拾いに行くのと変わらないようなものでして、決して誇れるものではありません。やはり、自分で考え、自分で選んだ馬を買わねば面白くないと思うわけです。しかも、このようなときに限って自分が最初買おうと思っていた馬が勝ってしまうのですから、このときの口惜しさは言葉で言い表せるものではないわけです。こうして偉そうに講釈をたれている私も、やはり同じようなことをやらかしているわけです。

数年前の話です。私はその日のメインレースは『ラプンツェル』を買おうと思っておりました。その日は暑い日でしたし、レースまで時間があつたものですから、ちょっと喉を潤そうとばかりに出店で麦酒を買って、いい気分を飲んでいたところでございます。厩舎の前である人が「もしもし、且さん、ここはポールシップですよ」

と、これが耳に入ったものですから、『ラプンツェル』をやめて、『ポールシンプ』を買ってしまったわけです。ところが、勿論皆様も知っての通り『ラプンツェル』が大穴を空けてしまった。その恨みは決して忘れておりません。ですから皆様も最初にこれと決めたら、人の言葉を聞いて、その上で却って馬券を外してしまうというのは、一番嫌な気持ちになるのではないのでしょうか。

ただ、人間に限らず、競馬をするものというのは弱いものであります。どうしても美味しい話を聞いてしまったらそちらに流されてしまうのです。特にこの競馬場の周りには、人妖を問わずカモを狙っている者たちがたくさんいるのですから、騙されないようにしないとならぬいわけです。じゃあ、そうならないためにはどうすればいいか、やはりしっかりと競馬と向き合わなければならぬように思うわけです。自分の予想に確信があり、自信を持って馬券を買えるのであれば、そういう甘い言葉にも流されないようになるのですから。

あと、皆様方がよく心配なさっている八百長に関して

ですが、少なくともこの幻想競馬ではあり得ないと言っておきたいと思えます。外の競馬ではいざ知らず、競馬場が意志を持つこの舞台で、そのような真似はできるはずはありませんし、何よりも巫女や賢者が主催する中でそんな大それたことをできる者がいるのでしょうか。また、馬主の側から言わせていただければ、馬は今は無事でも、いつ調子が下がったり、故障になったりしないわけでもないのです。そのようなことになれば、当分どころか、下手すれば永久に稼いでもらうということはできなくなるのです。だからこそ、一戦一戦を大事にレースには使っておりますし、もしどうしても整わなければ、出走しないということもするわけです。ですから、皆様にはそのような余計なことを気を回すことなしに、ただ自分の判断に従って、馬の実力本位で馬券を買うべきだと思っております。ただし、毎日の競馬ということもあるわけですから、どうしても調教代わりにレースを使っている者もいるのは事実です。そういった馬を見抜くというのも、競馬を見る者のたしなみなのかもしれません。

さて、話は尽きないのですが、そろそろメインレースが近づいてきております。今日のレースには、私の愛馬であるサイレンススズナも出走の予定です。以前故障したときにはどうなることかと思いましたが、奇跡的に一命を取り留め、その上でレースにまで出られるようになりました。以前のように圧倒的に逃げ勝つことは難しいかもしれませんが、新しいスタイルのスズナの姿を見ていただき、ご声援を掛けていただけたらこれ以上に幸せなことにはないように思います。

最後になりますが、私も、馬主として馬を持っているのですが、幸いなことに強い馬を持たせてもらったおかげで、中以上の成績上げることができておりますが、決して儲かっているわけではないのです。

大体の所、馬主は儲かるものではありません。最近では專業馬主として、生計を立てているものがあるのですが、それも稼ぐ馬がいなくなった後をどうするのか、損をする馬をしたときにどうするのか、そこを考えているのか心配になります。

所詮馬主という者は、公衆の面前で得をして、厩舎の裏で損をしているものなのです。得は人目に触れるくせに、損は人目に触れないのです。ですから、口さがない者からは、上手いことをしているように思われるんですが、本当は軒並み損をしているのですよ。

それでも何故こんな損をする馬主になってしまったのか、それはもはや病とまで言ってしまうても差し支えないほどに、競馬に魅せられてしまったからです。損と知りつつ止められないところまで来てしまっています。

まだ一シーズンを通じて儲けたことがありますから、私の理想としては、そんなに儲けなくても良いので、第一レースから、最終レースまで全て取ってみたいと思っていますのですが、なかなかそういう風にはいかないものです。

(於旧荒尾競馬場現幻想競馬場正面玄関前舞台)

〈了〉



阿求の恋 近藤貴弥

人里では、全ての物が春の香りで包まれていた。妖怪の山の頂きに薄く見えていた白い雪は、春の麗らかな光で溶け、跡には微かな紅梅が遅咲きの花を開かんとしていた。この頃になると、人里の川面には白梅が零れるようになり、桜の蕾もその姿を見せるようになる。

梅や桜に誘われるように、穏やかな陽気に導かれるように人々は足を動かし、冬の間ひっそりとしていた茶屋に明かりが灯され、客人の間では花見や行楽といった言葉が飛び交い、やれいつ行くやら、どこへ行くやらという話が花開いていた。一陣の風が吹き、春の予定が人里を駆ける。

人里の奥にある屋敷の垣根を超えた所にある書齋に、その風は辿り着いた。書き物をしていた九代目である御阿礼の子の稗田阿求は、ふと手を止めた。

「幻想郷縁起」の編纂が落ち着き、もう数年が経過して

いた。落ち着いたというのは、十代後半のように幻想郷中を駆け巡る必要が少なくなったということである。ここ最近では駆け巡った得た情報を整理して、書に認めているところだった。書齋で過ごす時間が多くなったがこの執筆が落ち着けば、また昔のように幻想郷を駆け巡り、過去との差異を見付け、書き足していくことだろう。そういうことをこの春も、次の夏も、秋も冬も続けていくことになっている。阿求はそれで良いと思っていた。

凝り固まった肩や首や腰を動かしながら、別のことを考えている阿求自身を見出していた。すなわち、このままで良いのだろうかと思っっている。書齋に引きこもり、書を認める生活は刺激が少ない。言の葉を紡いでいくという行為で刺激されるのは、頭だけである。加えて、ここ数日は、その言の葉を紡ぐという行為も進みが悪くなっている。一度見たことを忘れない阿求は、同じ言葉や似たような言い回しが続いてしまうと不安に陥ってしまう。不安を解消しようと考えるが、書にまとめ上げるということもしなければならぬため、阿求の心は先の冬



をまだ色濃く残しているように暗く寒い。このまま書齋に居たとしても、成果は上げられないだろう。

庭の木々から鶯の鳴き声が聞こえる。もうそんな時分になっている。阿求は書齋を飛び出し、屋敷の者に出てくる旨を伝えるとそのまま屋敷を出て、里へ降り立った。心地良い風が阿求の冷たい頬を撫でる。童が駆けると砂が舞い、下駄の高い音が通りに響く。往來の茶屋で見知った顔に呼び止められる。調子はどうか、最近はどうかと尋ねられ、阿求は変わらずやっております、と答えた。すると店の奥から別の店員が姿を見せ、お疲れでしょうと声をかけられた。盆の上には茶と善哉が用意されていた。

茶屋は人で溢れていた。阿求は店の端で小さく縮こまりながらも、店員の厚意を受け入れることにした。

頭は阿求が思っているよりもずっと疲れていたらしく、善哉の甘さが染み渡る。熱い善哉に火照った身体が、冷たい茶を一口飲むと落ち着く。

客人の中には、阿求と歳の変わらない娘達の姿もあっ

た。阿求と同じように善哉を食べながら、何やら話している。どうやら、將來のことについてらしい。見合いの相手がどうだとか、見合いと自由恋愛についてだとか、里の男がどうだとか、恋愛や夫婦生活の理想だとか、そんなことを話していた。阿求は彼女達の言葉を聞きながら、自然と自分自身の將來について考えるようになった。このまま、「幻想郷縁起」の編纂を続けるつもりでいるが、このままで良いのだろうかと思ってしまう。恋愛や夫婦生活を知らずに一生を終えても良いのだろうか。

稗田阿求は人里で暮らす女と全く違う運命を担っており、その運命に従って生活している。日々の暮らしは女中に任せており、掃除も洗濯も料理も裁縫も阿求ははななくていい。それでも、覚える、と言われれば瞬時に覚えられるだろうし、並の女のような生活は送れるだろう。ならば、そういう、所謂、人妻になるのかと自問すると非常に難しい。ならば、せめて、恋を、と考えてみるが、良い相手が浮かんでこない。阿求の場合、自由恋愛などなく、見合いになるのだろうか。見合いの場合、誰が相

手を選ぶのだろうか。稗田阿求が妻となるに相応しい相手、というのは人里では限られている。彼等の家の長男は、彼等の家の娘と結ばれるか、父が認めた女を妻として迎えることだろう。

稗田阿求という少女が彼等の関係に首を突っ込むことはない。稗田という家は、そういう人間の理から外れた家であり、阿求もそういう人間の理から外された者であった。歴代の御阿礼の子達の記録にも、恋愛や縁談や結婚という文字は出てこない。稗田阿礼の時代まで遡れば、媒酌人や進物の悩みが書かれ、正妻や後妻という言葉が現れるようになる。

そういう記録の最後に書かれていることは、己の務めすら満足に果たせないという嫌な心持ちが働いた、藤原氏の争いに巻き込まれるのは厄介極まりない、という阿礼の所感がある。阿礼のそういう事情から、御阿礼の子に結婚や恋愛というものから遠のいていったのであろう。しかし、と阿求は思うところがある。阿礼及び御阿礼の子達と阿求で決定的に違うところがある。博麗大結果

という結果や八雲紫による幻想郷の維持により、人間が妖怪に襲われるという可能性が低くなっている。「幻想郷縁起」の性質も長い年月の間で性質を変え、人間の生活や安全を守るための書、というほどものではなくなってきた。

その書の編纂は阿求にとって大切な役割の一つであるが、何もそれ一つが阿求にとって全てというわけではないだろう。編纂に余裕を感じられ、一日という長い時の流れの中で、阿求の心にも余裕が生まれたがための雑感なのであろうか。それでも、阿求はこの思いを、とりとめないもの、と片付けたくなかった。

阿求は、恋がしたい。

※

屋敷に戻り、食事の後も、阿求の胸は恋がしたいとい

う少女らしい思いで一杯だった。小鈴に借りた本の中に、外の世界の物語があった。身分違いの恋愛や宗教観の違いの恋愛や病に伏した女との恋愛……外の世界の物語は沢山の恋物語で溢れていた。阿求はその物語を読み、羨ましくなる一方で、ある切なさを見出していった。外の世界では恋は悲劇で終わってしまうものなのだろうか。阿求の人生は人里の人間よりも短い。後、十年も残されていない。その十年の内で恋による悲劇を迎えてしまえば、きっと立ち直れない。

物語の内の恋を思い返してみると、いずれも別離に悲劇性を見出している。すなわち、愛し合っている二人が離れ離れになること、が悲劇である。そう考えると、その別離は人と人との恋愛である以上避けられないものであり、恋愛に限ったことではなく、避けられないものである。いわゆる、運命と呼ばれるものが、恋愛の悲劇性を増長させているのだろうか。

阿求はその運命に打ち克てるとは思えない。阿求の一生には、生と死があり、避けられない。その生と死に限

られている中で、どれほど生きようか、と考えている。最近では、「幻想郷縁起」の編纂の方向性が変わり、認めるとなり、自らの手で紡がれる幾つもの言葉に考えの一部が持つて行かれることがある。御阿礼の子、という運命の他に、稗田阿求という一人の少女の運命についても考えるようになったのである。その一つに、恋があり、愛があった。

阿求に合う者が、この人里あるいはこの幻想郷にいるとは思えない。阿求がどれだけ恋や愛を希おうとしても、残りの人生は短い。その短さを優先してしまい、悲劇を見られてしまう。そんな悲劇を見るために、阿求は恋をしたいのではない。悲劇は結果でしかないだろう。阿求が感じたいのはもっと前にある、あの喜びや熱で感じたい。自らの生に悲劇という運命が待ち構えているのは、阿求自身が最も知っている。それでも、阿求は誰かに恋し、誰かから恋され、誰かを愛し、誰かから愛されたい。その相手は誰か、と考えると途端に恋や愛は幻となつて阿求の胸から消え去ろうとする。歳の近い者は、もう

相手がいる。縁談がまとまった話や式の参列やらについて、屋敷の使いの者から阿求の耳に入っている。

良い相手がいないというのは、贅沢な悩みなのだろうか。阿求の人生はもう折返し地点に入っており、先は長くない。となれば、この一生を捧げる相手、と考えてしまうのは当然であった。阿求がこの人でなければならぬ、という相手がいればいいのだが、阿求の胸には誰の影も浮かんでこなかった。

誰も浮かんでこないという現実には、胸が苦しくなる。

まるで自分は誰にも恋焦がれてはならない、と言われているようなものである。恋が芽生える相手がいないとなれば、誰かから恋情を向けられているのか、と考えてみたがこれも誰も浮かばなかった。

やはり阿求の一生は「幻想郷縁起」の編纂をして、一人淋しく死んでいくもののだろうか。歴代の御阿礼の子は、それを運命として受け入れていた。限りなく人間に近く、限りなく人間に遠い。種族としては人間であるが、その有り様はともだが人間のように見えない。だ

から、孤独を友として耐え忍ぶしかない。人間のために「幻想郷縁起」を編纂を続けているのにも拘らず、何故、御阿礼の子というだけで孤独を受け入れなければならぬのだろうか。阿求はそんな一生を歩みたくなかった。

※

夜になり、阿求はようやく「幻想郷縁起」の編纂を再開した。使いの者にはやることが終われば明日に備えて寝るように、来客は人間ではない可能性があるので出ないように、急用の際は阿求自身で対応する、とも伝え、阿求は一人で編纂を続けていた。小さな置き行灯を文机の端に置き、筆を進める。

人里の活気が夜になると幾分か静まるように、その日の間、阿求の胸にあった悩みも静かになった。日が一日、時が一刻と進んでいることに気づくと、それまで考えて

いたことが頭の端に追いやられ、編纂に集中できるようになった。自らの務めを果たさなければならぬという義務感や焦燥感が、阿求を動かしていた。

けれども、それらの感覚は一時的なものでしかなく、しばらくすると溜息を零し、筆を置いてしまう。春の陽気は今では屋敷の内から消え、夜気だけが満ちていたが、阿求の胸にある思いは灯火のように灯り続けていた。その熱が、頬にまで上ってくるのか、微かに熱い。

相手もいるわけではないのに、そんなことを考えてしまう自分自身が恥ずかしい。今の阿求は、茶屋で話していた彼女達と何一つ変わらないような気がした。昼の时分では、そんな自分も良いのではないか、と思っていたが、日々の務めに支障を来すのであれば、考えものである。もし相手がいるとなれば、きっと阿求はその相手のことばかり考えてしまおうだろう。

普通の人間のような一生を歩みたい気持ちはある。しかし、その一生は御阿礼の子という一生と相反する。阿求の一生には、あまりに時間が足りなかった。もっと沢

山の時間が阿求に残されていたのならば、阿求は迷うことなく両方の生き方を選んだだろう。どちらか一方しな選べないのは、あまりに辛く苦しい。

阿求が眉を顰めていると、廊下の方から足音が聞こえてくる。

足音は、障子の前で止まった。阿求は使いの者が何かあったのであろうと思い、優しく声をかけた。

「何かありましたか？」

返事はなく、静かに障子は開けられた。欠けた月は薄雲に飲まれ、仄かな光を降り注いでいる。

阿求は置き行灯を少し部屋の中央に寄せた。けれども、明かりは障子付近まで届かず、部屋に暗い影を落とす。使いの者は阿求が訊いても、何も答えない。使いの者ではないのだろうか。阿求は低い声で、問う。

「どなたです？」

「酔い覚ましよ」

「勝手に入ってきて、また怒られますよ？」

「ここしか入れないんだから仕方ないじゃない」

陽気な酒臭い声。阿求はその声に聞き覚えがあり、暗がりであったが微笑を取り繕った。阿求が客人の顔が見えないように、客人もまた阿求の顔が見えなかったのにも拘らず。

阿求は文机の上に置いていた書をしまい、端に置いていた湯呑に紅茶を注ぎ、奥へ滑らせた。

「今夜はどこで飲んできたんですか、妹紅さん」

客人である藤原妹紅は、悪いわね、と零すと紅茶を一口飲み、鼻歌交じりでこう答える。

「みすちーの所へ行って、里に新しくできたっていうお店あるって聞いて……その店主に良いお店があるって聞いて……まあ、そんなところよ」

「夜具を用意させましょうか……?」

「皆、寝てるんでしょ?」

「ええ、もう遅いですから」

「それで、阿求ちゃんは?」

妹紅は朗らかな調子で、阿求の神経を逆撫でするように訊く。阿求は戯言を聞き流すように平静に答える。

「……仕事ですよ」

「今夜も明日も阿求ちゃんはお仕事。皆が寝静まっても、編纂を続けて、大変ねえ」

「代わってくださいますか?」

「無理よ。私は賢くないものの」

と言い切り、妹紅は笑った。阿求は彼女の笑い声を聞き、微かに怒りを露わにした。

「でも、妹紅さんでしたら、いくら時間があっても大丈夫ではありませんか?」

「そういうわけにはいかないのよ。私だって、忙しいんだから」

阿求は形の良い両眉を眉間に寄せ、溜息を吐いた。その言葉には、今までの言葉と比べものにならないほどの怒気を孕んでいた。

「私だって忙しいんですよ」

妹紅はその怒気に勘付いたのか、それまで朗らかだった調子を引っ込ませ、阿求の身を案じ、労るように声をかける。

「ずっと忙しい日が続くとも身体の悲鳴が聞こえなくなっちゃうからね。阿求、今の間に休みましょう。夜具ぐらい、私が目意してあげるじゃない」

妹紅の表情は見えない。しかし、妹紅の顔に見たことのない女の顔が浮かんでいるのを、阿求はありありと感じることができた。子を見守る母のように優しい顔をしている。

阿求はこの時、妹紅にならば、この胸に蔓延っている恋情や愛情について話してもいいのではないか、と思った。

藤原妹紅という少女が、どういう半生を歩んできたのか阿求はよく知らない。それでも、藤原という存在がどういう存在なのかは、阿礼や阿一の記録で読み取れる。そういう身分である彼女が、恋や愛を知らないとは思えない。

文机の下で、阿求は微かに両膝を妹紅の方へ動かした。「酔い覚ましに、少しお話でもしませんか？」

声は、阿求が思っていたよりも期待に濡れ、自らの疑

問を解決してくれるであろうという喜びに震えていた。けれどもその震えに、阿求ははつきりとした羞恥を感じ取っていた。阿求はこの生涯で、誰かに恋や愛を話した記憶はなかった。慕うだけで精一杯だったのだから。

妹紅は阿求の続きを待っているのか、何も言わない。部屋に、沈黙が落ちた。阿求がどう切り出せばいいのか分からなかった。阿求の頭に、阿礼の残した手記が浮かんだ。けれども、妹紅にそのことを尋ねるのは、事の委細を訊くのは、阿求個人の思惑としてはあまりに重い過去であり、「幻想郷縁起」編纂の延長として考えるにはあまりに遠い過去であった。それでも、阿求にはその記録しか残っていないような気がしてならなかった。

阿求は口の端が微かに震えるのを感じた。

「阿礼の記録を見ると、己の務めすら満足に果たせないという嫌な心持ちが働いた、藤原氏の争いに巻き込まれるのは厄介極まりない。そんな記録がありました。妹紅さん、何か知りませんか？」

「そんな昔のことを知って、どうしたいの？」

妹紅の静かな調子に、阿求も心持ち冷静さを取り戻し続ける。

「恋が、したいです」

妹紅は阿求の返事が予想外だったのか、言葉を詰まらせる。阿求の頬は熱を帯びたが、一度零れた思いは留まることを知らなかった。

「誰かを愛したいです、誰かに愛されたいです。誰かに好きって言いたいです、誰かに好きと言われたいです。他の女の子と変わらないように。そんな、普通の生活を送りたいです」

目頭が熱くなる。けれども、今、涙を零してしまえば妹紅と話せなくなってしまう。阿求は堪え、妹紅の言葉を待つ。妹紅は阿求の思いを聞き、夜闇に溶けるように、幾つかの言葉を紡いだ。赤く染まった阿求の耳は、妹紅の言葉を聞き逃さなかった。

「……良いものじゃないわよ」

「分からないじゃないですか」

阿求は半ば叫ぶように、妹紅の言葉を否定した。理性

の一欠片で、妹紅が何故そういう言葉を口にしたのか考えようとしたが、烈しい感情の波に飲み込まれてしまった。妹紅は揺らぐことなく、落ち着いて言う。

「阿礼も書いていたでしょう？ 稗田の結婚は普通の結婚とは訳が違うのよ。私達、藤原がそうであるように」

「なんですかそれ……」

「そのままの意味よ。恋も結婚も同じよ。駆け引きの道具でしかないの。伸し上がるための手段。政のね」

「じゃ、それじゃ……」

妹紅の言っていることが事実であったとすれば、妹紅もまたそれらのことに巻き込まれてしまったということなのだろうか。阿求も知っている伝承の内に、彼女の父のことや輝夜のことがある。駆け引きの道具、伸し上がるための手段、と言い切った妹紅であったが、

彼女自身がそうしたのかどうか分からない。けれども、藤原、という以上はそういうことでもしたのであろう。

恋や愛の話の中に、道具や手段、政というものも出てきて、更に阿求の範疇を超えた話となっていた。懸命に、



それでも、と鼓舞を続けても、妹紅を前にすると途端に弱々しいものになってしまう。妹紅はそういう時間の中で生きてきた者であり、阿求はそういう時代から切り離されて生きてきた者である。

阿求は堪えられなくなった涙を零し、肩を震わせ、言葉を並べる。

「普通に、生きたいんです。普通の暮らしが、したいです。阿礼はできないと思います、世帯を持たずに、ということ考えたかもしれませんが。満身に務めを果たすのが難しくなるかもしれません。それでも、私は普通に生きてみたいんです。そんな、そんなことすら叶えようとしてはいけないんでしょうか……？ 希望を持ってこの一生を謳歌して、死にたいんです」

妹紅の冷たい声音に、温もりが宿る。遙か昔に懐いていた希望を、思い出しているのだろうか。

「……希望？」

「私には、編纂しかありません。それだけで終わらせたくないんです。他の人間達のように長くは生きられませ

ん。後、十年もないでしょう。我が儘と思ってもらっても構いません。他の人間は私のことをよく知りません。今から知ってもらっては、私の身体は持ちません。もう、遅いんです」

阿求の腰はいつしか浮き、妹紅の一言一句を聞き漏らさないように前のめりになっていた。置き行灯に照らされた妹紅の顔は、阿求の顔と同じように赤く染まっていた。その顔を見て、阿求の顔は一層赤くなった。膝が微かに震えを帯びる。

妹紅は顔を見られたのを恥じるように、置き行灯の火をふっと吹き消した。妹紅はそれから、消え入るような声でこう言った。

「私だったら、阿求のことよく知っているわよ。遅く、ないわ。私だったら……その希望になれるかしら……？」

阿求は身体中の血潮が沸き立つ情熱を覚えた。その言葉がどういふ意味を持っているのかとということとは分かる。けれども、ああいうことを言った妹紅の言葉であ

る。どういう心変わりがあったのか分からなかった。何と答えればいいのかも分からなかった。

それでも、この機会を逃してしまえばもう二度とないような気配だけは、阿求にも分かった。

阿求は何も言わず、暗がりでも妹紅の指先に触れた。その冷たさに驚き、一瞬反射的に離そうとした。けれども、妹紅が、阿求の汗ばんだ手を追いかけて、その手首をしっかりと掴んだかと思えば、離さなかった。

※

桜が満開を迎え、人里はいよいよ昼も夜も活気に満ち満ちていた。やれどこの桜が良いだ、やれどこの店が良いだ、やれどこの酒が美味いだ、そんな話題がどこでも聞けるようになった。花見や酒の肴に、稗田阿求の恋が話題に挙がるようになった。曰く、花開くように阿求の顔にも幸せが開くようであった。曰く、屋敷から出てこ

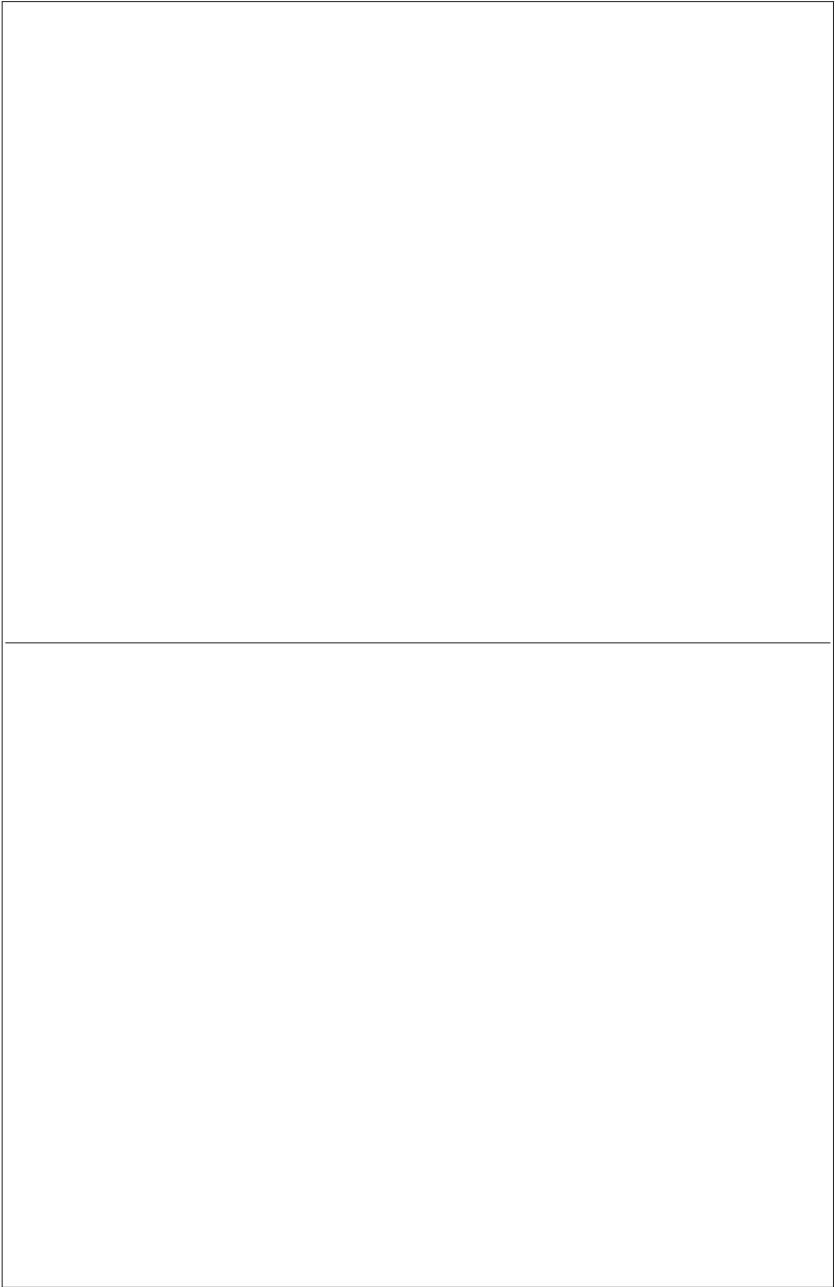
ないのは残りの一生を恋人と過ごすためである。そういう噂話が、里の人間の間で噂されるようになった。

阿求の屋敷は、外の喧騒から切り離されたかのように静かであった。往來の桜が満開を迎えているように、中庭の枝垂れ桜も満開を迎えていた。阿求は編纂の手を止めることなく、黙々と続ける。文机の向こうには頬杖を突き、ぼんやりと桜を眺めている妹紅の姿があった。

阿求は自然と彼女を招き入れ、妹紅も自然と招かれた。二人は揃い合わせたように、あの夜のことには口にしなかった。何がどうして二人が居るのか、ということを確認かめ合うことをしなかった。阿求の恋への希望が、妹紅の胸を揺り動かしたのであるか。あるいは、阿求の普通に生きたいという願いが、妹紅が随分昔に忘れていたものを思い出させたのであろうか。

阿求は編纂の手を止め、その顔に眩い幸せを溢れさせ、そつと確かめるように彼女の名前を呼んだ。

〈へ〉



## 後書き

この度は、菊池寛没後七十年記念合同「東方春秋」を手にとっていたとき、まことにありがとうございます。後書きを書いている時は、諸々の作業を終えた時なのですが、べ切まで十二時間を切ろうとしております。主催分の原稿を書き上げたのが、べ切三日前。今年は余裕のあるスケジュールを組んだつもりでしたが、全く予定通りに進まず苦勞しております。

本合同は、今まで主催した合同誌とは違い、クローズドという形で主催し、参加者の方に寄稿をお願いいたしました。この場を借りて、お礼申し上げます。

二〇一八年九月下旬 近藤貴弥

きくちかんぼつごななじゅうねんきねんごうどう  
菊池寛没後七十年記念合同 「東方春秋」  
とうほうしゅんじゅう

発行日 二〇一八年十月二十一日 初版

原作 東方Project (上海アリス幻楽団)

印刷 ちよ古つ都製本工房

発行者 近藤貴弥 (出藍文庫)  
こんどうたかや しゆつらんかくこ

連絡先 ··· stkk7 · 920521@gmail ·  
com

執筆者

柳筥 (筑景舎)

ひととせ (四季堂本舗)

久我暁 (青猫幻想団)

※本書の無断転載・複製・無断販売等を禁じます。